

南日本の衣料について (第2報)

—奄美の芭蕉衣—

小林孝子

A Study on Clothing in Southern Japan (Report 2) Clothes made out of Bashofu Cloth in the Amamis

Takako KOBAYASHI

I. は し が き

芭蕉は、南西諸島において古くから衣料として用いられた。すでに第1報¹⁾では、奄美の芭蕉の採集・紡織について報告したが、今回は、奄美の芭蕉衣について報告する。

すでに日本書紀には、斉明天皇三年(657)七月条に海見嶋、天武天皇十一年(638)七月条に阿麻弥人と夫々奄美について記されているが、その生活などについては詳かではない。慶長十四年(1609)以降の薩藩治下になると、いくつかの記録がみられるので、そのうち嘉永三年(1850)から安政二年(1855)に至る幕末の5年間を、大島の名瀬間切で過した薩摩藩士名越左源太時敏の「南島雑話」の資料を中心に、現代の文献および、奄美の古老たちからの聞き取りなどによって、奄美の衣生活の中での芭蕉衣について明らかにしたいと思う。

II. 奄美の芭蕉衣

- 1 芭蕉の帷子を芭蕉衣ばしやぎんと云。
現代も同様バシヤギンという。ただし、バシヤギンは大島を中心とした呼称で、本土に近いトカラ列島ではバシヤギモン、与論島ではバシヤキパラという。
- 2 衣服は、紬を上とし、木綿を用ゆ。夏衣は、芭蕉にて、何れも島婦是を織る。皆縞織にて、其工みなる事は、越後、或は硫球細縞等にも専劣るべからず。
以上は、夏季衣料としての特色を述べている。
- 3 朝衣といへる官服あり。極上々の芭蕉素を以て、至て細密に績たるを、素の儘に数篇藍にて五日計り飽まで染て織調へ、類族集りて替る々々擣衣する事二三昼夜なり。成功になりたるは其光沢恰も靨目が如し。之を広袖の大礼衣服に縫調へ、広帯をするなり。……此服は、郷士格・与人・間切横目の分、着するなり。……女も、此服に類したる極上芭蕉にて、朝衣の如く織たる「たなべ」といへる白き服あり。諸横目以上の妻女など、祝事等にこれを常衣の上着にして、吾藩の女打掛の若くに、帯なしに着す。其時は、頭にはさぢといへるものを冠るなり。
- 4 タナベ 婦人大礼の服、地合極上、生芭蕉 此生芭蕉を絹芭蕉と云。

